

## 元代新出茶名考

Examination of the New Tea Names Arising in the Yuan Dynasty

趙 方任<sup>1</sup>, ウリジバヤル<sup>2</sup>

Fangren Zhao<sup>1</sup>, Wulijibayaer<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学国際センター, <sup>2</sup>新潟産業大学経済学部経済経営学科

キーワード：茶名, 元代, 茶文化

Key words : New tea name, Yuan dynasties, Tea culture

### 1. 研究目的

本研究は収集した茶詩を精読し、分析により元代喫茶文化の特徴を解明していき、その上で、現地調査で文献資料の裏付けを取ると同時に、モンゴル族を中心とする少数民族の喫茶様態の地域性も考査、考慮し、元代喫茶文化の全体像及びその特徴を解明していくのは本研究の目的である。

本研究代表者が科研費の助成研究課題である

「中国元代茶詩の全収集と解析研究」を通じて収集した茶詩は主な研究対象史料である。また、元代喫茶文化の特徴を見出すのに、その以前の唐代、宋代の喫茶の状況を分析する必要がある。この面に関しては、本研究代表者が著した『唐宋茶詩輯注』、『唐代茶詩中的茶文化世界考察』、『宋代飲茶文化美学意識研究』、『唐宋時代之「花茶」文化分析』、『茶粥文化考察』、『中国茶文化における喫茶用水に関する審美意識をめぐって』など既存研究結果によるところが大きい。

そして、本研究は、見出した「特徴」の視点から元代喫茶文化が後世への影響、特にモンゴル族喫茶及び日本五山時代の寺院茶への影響を考査する見通しでもある。これは日中喫茶文化の相違点及び「茶禅一味」の本質を究明する次期研究につなげたいと考えている。

後世への影響に関して、「モンゴル族」と「日本五山寺院」に限定する理由は主に以下の推理に基づいたものである。

元代は言うまでもなくモンゴル人による政権なので、政権が滅びても、民族内の飲食民族習慣の継承はほかの地域より強いと思われる。

中国の「元」の次の王朝は「明」である。明代になると異民族政権に反発する意味合いもあり、喫茶法は大きく様変わりした。茶の粉を湯に溶か

して一緒に飲むという従来の「点茶法」から、茶を湯に浸けてその浸出液のみを飲む「撮泡法」に変わった。つまり、中国で元代喫茶法はほぼ継承されていない。一方、日本に「点茶法」が今でも存続し、しかも五山時代は元代とほぼ同時期で、僧侶の交流も頻繁なので、元代茶の影響を受けた可能性は十分考えられる。

周知の通り、元の時代のモンゴル族は世界大侵攻をやり遂げたわけだ。その大侵攻につれ、喫茶文化も中央アジア、西アジアまで広まったと思われる。従って、これらの地域の喫茶文化の調査は元代茶の影響に関する研究において有意義だと思われる。ただし、今回の研究は時間、労力が限られたので、これらの地域の調査を今後に期待したい次第である。

### 2. 研究実施内容

本研究の研究手法は二つである。これは研究の手順でもある。

その一、茶詩を中心とする史料の分析。

その二、現地調査で史料分析の結果の裏付けを取る。

史料研究は元代新出茶名に注目し、以下のような分析結果を得た。

一：元代のすべての新出茶名は茶湯にほかの飲食物を添加することにかかわるものである。つまり、「添加茶」の発展は元代喫茶の一大特徴である。

二：「添加茶」文化は唐宋時代の前にすでに誕生し、宋代の添加物の種類がすごく発達して豊富に、すでに三十種類以上に及んだ。元代の添加物は種類だけで言えば、宋代より逆に減少の傾向に転じた。しかし、元代の新出茶（茶名）に登場した添加物は「酥（油）」、「炒り米」、「炒り小麦粉」、「馬思哥油」、「牛乳及びその類の乳製品」などに集中

している。これらの添加物が唐代、宋代と異なって、モンゴル族を中心とする北方遊牧民族の飲食特徴を呈していることは明らかである。つまり、モンゴル族の色が濃く染まっているのは元代喫茶文化の特徴である。

三：元代喫茶は宮廷、文人、庶民の間に異なる傾向を示している。複数の宮廷に仕えていた御用官僚が新出茶名記録の担い手になっている事実から、宮廷はすでに添加茶喫茶法を主な喫茶法として受け入れたことが分かる。庶民喫茶に関しては、民間の茶店（喫茶店）を中心に新出茶名の出現頻度が最も高く、庶民の間で添加茶がある程度普及していることが分かる。対して、文人の茶詩においては、新出茶の登場頻度が最も低いことから、北方遊牧民族の添加茶喫茶法をなかなか受け入れていない事実が確認できる。一方、茶詩の中に唐代、宋代の伝統的な喫茶法の色が濃く反映されていることもわかる。

四：「清飲法」（茶湯にほかの飲食物を何も入れない喫茶法）の概念は元代に起源すると思われる。

現地調査は、コロナの感染拡大の影響により日本のお寺に限られ、裏付け作業、特に後世モンゴ

ル族への影響に関してはオンライン調査に頼るしかなかった。今後、可能なら現地に赴き、より広範囲の民俗喫茶資料を収集する所存である。

### 3. まとめと今後の課題

一首の元代茶詩を引用しよう。

胡奎《寄震龍門和尚》（其一）

安平池子上，不到十餘年。

石老三生夢，茶枯一味禪。

澗泉通屋下，山雨落尊前。

我亦除煩惱，還來了勝緣。

詩の翻訳を省略するが、「茶枯一味禪」は恐らく「茶禪一味」の語源だと思われる。これからこの概念の伝承ルートを辿って、つまり元代茶の影響をより研究すれば、日中茶道の相違の分岐点及び「茶禪一味」の本質を究明できるとと思われる。

### 4. この助成による発表論文等

#### 雑誌論文

[1]《元代新出茶名考》という論文を「人間生活文化研究」に投稿した。